

藤波孝生氏は三宅氏の大学時代の2年後輩で、第2次中曽根内閣の官房長官となった人物だ。

「私の赤坂の事務所に彼が直接電話を掛けてきて、『先輩、プライベートなことでお願いがあります』と」

三宅氏は藤波氏から、後援会の新年会など2つの講演の代役を頼まれ、引き受けたという。

「もしたら、議員会館の彼の秘書が、100万円を届けに来たんですよ。『これで、往復の旅費込みでお願いします』と。『さういふ話なんですよ』」

封筒は藤波事務所の封筒だったという。

「内閣なんかの封筒ならばね。私も、『えっ、内閣機密費か』なんていうんだらうけど。全くそんなことを思わずに、『はい』って、受け取ったことがあるだけだね」

ちなみにこのカネについて三宅氏は、領収書を書いていない。「だって、ポケットマネーみたいなものだと思っただけから」という。

れこそ、「政治とカネ」の問題である。内閣官房からの領収書不要のカネは、機密費である可能性が限りなく高い。そしてまた、この受領したカネを仮に納税申告していない場合は、所得税法違反の疑いさえある。

取材記録に戻ろう。三宅氏は続けて、野中広務氏の発言についても反論した。

「僕は、大変憤慨している。さういふことをいうのなら、

三宅氏は取材に応じない

ここでポストの記者は一度電話を切ったが、ある疑問点が浮かんだ。かつて『週刊現代』（01年8月11日号）

が機密費について報じた際、三宅氏の「中曽根内閣の時に税制調査委員会に入るよう頼まれて断りましたが、そのときに『さうおっしゃらないで』と100万円持

ってきましたよ。知恵を出した謝礼として受け取りました。機密費かどうかは分かりませんが」とのコメントを掲載していた。先ほどの取材内容と同時期のこと

誰に渡したのか、いえっちゆうんですよ。誰と誰に渡したんだ、と。(中略)私は野中から菓子折り一つも

らったことがない。さういえば、新幹線の車内で野中にたまたま会ったとき、『もらいもので失礼だけど、いかがですか』と、10000円か20000円ぐらいのおみやげをくれたことがあっただけで。野中からカネなど全くもらなかったことがない」

と考えられる。証言の食い違いについて、確かめなければならぬ。記者は改めて電話した。

「僕はそんなことを答えた記憶はないよ。だいたい、税制調査会の時は、いつかきたのは、藤波だったかも知れないけど、中曽根さんの強い意向だということだ、(中略)断わったということはない。最初からメンバーですよ。そんな、(断わって)謝礼を受け取ったなんて事実無根です」(編集部で確認したところ、中曽根内閣当時、

三宅氏は税制調査会の特別委員を務めていたことがある)さういうと、三宅氏は機密費について新たなエピソードを明かした。

「僕はさっき、いいにくいからいわなかったんだけど、伊東正義さんが、大平内閣の官房長官になったときに、(伊東氏)本人が私の事務所

に、(現金を)持ってきたことはあったんですよ。額は知りませんがね。私は伊東さんとは、もともと知っている仲だからね。だけど、『私はそんなものを受け取るわけにはいきません』と断わったら、『ああ、さうですか』と、彼は世間話をして、帰っていった。伊東正義さんという人は清廉潔白な人というイメージがある人だからね。だからあまりそんなことはいいたくないんだけどね」

記者が二度にわたって電話取材し、いずれも『週刊ポスト』と名乗ったことはしっかり録音記録に残っている。いつまで三宅氏は、「名乗っていない」などという無茶な強弁を続けるつもりなのだろうか。

もりのだろうか。

そもそも、私は以前の『たかじん』の番組でも三宅氏に直接質問し、取材も依頼し、今回の収録後も編集部を通じて対談を打診している。ところが、三宅氏は「下品な上杉」「下衆の勤ぐりをするポスト」の取材は受けないとの一点張りだ。

しかし今回の件は、三宅氏の方からテレビという公の場で聞いてきたことだ。都合の悪い時は質問から逃げ回る割には、テレビカメラの前だと途端に威勢がよくなる。さうした「下品」な行為を繰り返しているのはどちらの方なのか。二転三転する機密費についての発言のどれが真実なのか。いづれにせよ、「嘘つき」呼ばわりされた身としては、三宅氏にこそ「嘘つき」という言葉をそのままお返ししようではないか。

訂正 小誌7月23日号の新聞広告に「朝日新聞論説委員は、大炎上」との記述がありました。論説委員は「編集委員」の誤りでした。訂正いたします。

目からウロコの必笑レッスン!!

新

GOLE

練習嫌いはこれを読め!

「スイング強化書」

ボストサビオムズ

内藤雄士

ツアーズ

弘兼憲史

漫画家

大発中

オールタイムベスト

定価1,260円

978-4-09-100154-9

小学館